東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

リオデジャネイロ日本人学校の運動会とブラジルの体育科指導例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中田,卓良 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174050

リオデジャネイロ日本人学校の運動会とブラジルの体育科指導例

前リオデジャネイロ日本人学校　教諭
北海道札幌市立新川小学校　教諭　中　田　卓　良

キーワード：体育館、運動会、ブラジルの体育科教育

１．はじめに

在外派遣３年間の自分に与えられた役割の中で、一番大きなものは「体育指導」だった。小学１年生から中学２年生までの20人弱という小さな集団への指導であったが、年齢差・体力差のある児童生徒に「合同学習」という形で指導することは今までに経験のないものであった。個々の運動能力に合わせて効果的な指導をする難しさもあったが、それ以上に「やりがい」の方が大きかったと思う。少しずつではあったが、限られた用具・器具を活用しながら、工夫した学習の場を設定し、「子どもたちの生き生きと活動する姿」を引き出すことができたのは、自分にとって大きな喜びであった。

２．すべての活動を支える体育館

治安の関係で、それまで使っていた大きな校舎から、今の小さな仮校舎に移転してきたのは約６年前のことである。今現在使用している校舎は、日系協会施設の一部であるが、過去に宿舎だった小さな部屋を教室として使っている。もちろん、学校ではないためグラウンドはない。唯一ある体育館で、ほとんどすべての体育学習を行っている。それでも、自分が在籍した３年の間に、駐車場の隙間に「鉄棒」と「走り幅跳び用の砂場」を設置していただいた（子どもたちの体力を高める遊具も少しずつ作っていただき、雲梯とジャングルジム、ブランコも設置していただいた）。

さらに、当たり前であるがプールもなく、夏になると別の施設と契約して、水泳学習を行ってきた。約２か月の間に10数回学習を行うので、子どもたち・教師にとって、バスで行き来するのは時間的にも体力的にも正直なかなかの負担となったことは否定できない。

休み時間には、みんなで「おにごっこ」をしたり、「一輪車」をしたり、「ドッジボール」をしたりと、思う存分に体育館で汗を流した。

全校合同体育「マット運動」の様子（H24）

３．運動会

毎年６月には、運動会が行われる。普通の学校では、グラウンドで実施されるはずの大きな行事「運動会」は、リオデジャネイロ日本人学校では、やむを得ず体育館で行われた。赴任した１年目は、正直受け入れがたい環境ではあったが、文句も言わず、ひたむきに各種目の練習に取り組む目の前の子どもたちの様子を見ていると、「ここでできることをがんばろう！」という気持ちになった。

狭い体育館では「短距離走」はできず、徒競走の種目はあきらめて「竹馬走」で代替えしてきた。しかし、どうしても子どもたちの走る姿を見たくて、２年目からは「紅白リレー」を種目に加えた。リレーの練習では、どの子もいつも気持ちよさそうに全力疾走の姿を見せた。体育館で走るリレーなので、コーナーはかなりきつく、上学年になりスピードが上がるほど、滑らないようにバランスをとりながら走るのは難しそうだった。小学部１年生から中学部２年生までつながるバトンリレーは、かわいらしい走りから、力強い走りになっていく姿が見て

いて感動を呼ぶ。何より、リレーで盛り上がる数分間は、みんなの絆が実感できる最高の一時となった。

他の種目もおもしろく、「8の字跳び」という種目も行った。3分間で何回跳べるかというものであるが、これは紅組白組の勝ち負けは関係なく、みんなで力を合わせて最高記録に挑戦するというものであった。小学1年生から中学2年生までの体の大きさの違う集団が、リズムを合わせて跳んでいくのはなかなかハイレベルであった。自分が在籍した3年間での最高記録は「261回」だった。

また、その他にも体力テストで行う「シャトルラン」も種目にあって驚いた。この種目はなぜかとても人気があり、全校児童生徒だけでなく、保護者や一般の人、また交流校である連邦大学の学生（ブラジル人）もたくさん参加した。中学生や体力自慢の大人が100回オーバーの記録を出して、会場を大いに沸かせていた。

日本（札幌）の運動会では、1人約3種目（リレーの選手は4種目）にしか参加しないので、出る時間よりも待つ時間の方が圧倒的に長く出番が少ない。しかし、少人数の日本人学校では下記の表のようにたくさんの種目に参加して、休む暇がないぐらい出番があるので、子どもたちにとっては充実したやりがいのある行事になる。

最後には、児童生徒、日本語モデル校児童生徒、連邦大学学生、保護者、来賓の方々と、みんなでおいしいブラジル料理を食べながら交流し、楽しい一時を過ごして全てのプログラムが終了になる。

	競技種別	種　目　名
		入場行進・開会式
①	全校体操	ラジオ体操
②	個人競技	竹馬走　※
③	交流競技	大玉転がし
④	交流競技	玉入れ
⑤	個人競技	シャトルラン　※
⑥	親子競技	二人三脚
⑦	応援合戦	エール「心を一つに」
⑧	団体競技	8の字跳び　※
⑨	団体競技	紅白リレー
⑩	交流競技	借人・借物競走
⑪	幼児競技	かけっこ
⑫	全校表現	南中ソーラン
		閉会式・交流昼食

運動会プログラム（H26）

4．ブラジル（リオデジャネイロ）の体育科教育（高校）の実際（1例）―日本との比較を通して―

日本（札幌）では、特に体育科（小学校）の研究を中心に進めてきた。そこで、ブラジルにおける体育科指導の実際を把握し、日本の体育科指導と比較することで、「日本にないもの」「日本より優れているもの」などを学び、ブラジルの体育科指導の良いものを吸収して、今後の実践に生かしていきたいと考えた。

3年間で計3回（毎年9月に1回）同じ公立高校を訪問させていただき、授業の参観をさせていただき、女性教諭（教師歴15年）と生徒たちに簡単なインタビューをおこなった。

(1) 体育科で扱っている学習内容

学習内容は、主にサッカー・バレーボール・ハンドボール・バスケットボールの4種目だけ（3年目の参観時には「卓球」もやっていた）である。その他は一切しないようで、小中学校もこの4種目以外はしないらしく、その中でもサッカーを中心に行っているとのことであった。この他に「保健」の学習がプラスされる。

(2) 児童生徒への指導・支援の在り方

指導・支援については、試合が中心で指導らしいものはあまりないようだ。試合中も先生の指導は一切なく（もちろん審判もしない）、ただその場にいるだけであった。今回、参観させていただいた先生は、バレーボールだけ手本や模範を見せるが、それ以外は一切見せないということだった。

(3) 評価

評価については、2ヶ月に1回（年4回）評価をし、テストはないとのこと。評価段階は0~10段階（評価基準・規準等はわからない）で、4回で平均5（例：①5②5③5④5はギリギリセーフ）を下回ると留年するということだった。

(4)「ブラジル体操」の活用

日本では、「ブラジル体操」を取り入れた実践を行っている学校もある。今回、訪問させていただいた学校では、「ブラジル体操」の実践はないようだ。生徒にも聞いたが、存在そのものを知らないようだった。日本では、スポーツをする前のウォーミングアップで取り入れられていることも多い「ブラジル体操」（自分も高校の野球部で毎日やっていた）であるが、逆に本場ブラジルでは、あまり有名ではないようだ。

(5) 日本とブラジル（リオデジャネイロ）を比較して

日本のように、器械体操や陸上、武道など学習内容（分野）がたくさんあるわけではなく、球技（4種目）に絞り込んで学習を進めていることに驚いた。結果的に、球技しかやらない環境（他に手を出さない）なので、女子でもサッカー・バレーボールがとても上手だった。日本では、女子は球技が不得意な子が多いと思うので、ここがブラジルとの大きな違いに感じられた。

今回は、残念ながら教師の指導・支援などの具体的な様子は見られなかった。試合を行っていても、声をかけるでもなく、審判をするのでもなく、日本との大きな違いに驚いた。ただ、自分の専門（今回の先生はバレーボール）だけは、手本を見せたり、指導をしたりするというやり方もとても斬新だった。日本では、全てを指導できないと教師になれないと思っていたので、この部分も日本との大きな違いとなるだろう。

評価については、評価基準・規準ははっきりしなかったが、年に4回も評価していることには、正直驚いた。しかも、10段階で平均5を下回ると留年というのは、かなり高い線引きのように感じた。一生懸命やらなくても文句は言わないが、クリアしなければ容赦なく切り捨てるというやり方は、日本にはないスタイルなので、この部分もとても大きな違いである。特に、日本では体育の苦手な子も多く、体育ができなくても他の教科でがんばれば問題ない世界でもある。そう考えると、ブラジルのやり方もある意味、厳しい環境である。「進学」「受験」を考える場合に、切り捨てられることが多い「体育」であるが、体育を重視する立場の自分にとっては、ある一定水準をクリアできないと留年するブラジルのシステムはある意味良いやり方だと思った。

3年間、同じ学校を訪問させていただき、いろいろと勉強になった。本当は高校だけでなく、中学校や小学校、幼稚園なども訪問したかったが、逆に1つの学校に絞って参観できたことで、体育以外にも様々な学習を観ることができ、学びの多い機会となった。

5．おわりに

自分にとって、全国から集まった子どもたちと全国から来た先生たちと一緒に学校生活を送れたことは、最高の勉強になったと強く思っている。

特に、全校合同の「体育指導」を3年間任せてもらえたので、試行錯誤しながらも、今まで自分が研究してきた専門分野の経験を、微力ながらではあったが発揮することができて本当によかったと思っている。残念ながらグラウンドがない環境だったが、子どもたちが大好きな「体育」という学習を通して、リオデジャネイロ日本人学校のすてきな「体育館」で、子どもたちみんなと楽しい時間を過ごせたことは、自分にとって最高の宝物となった。

全校「紅白リレー」の様子（H25）